

レゾ／＼／＼ちんちん談義

第八回

文学にみる「居心地」

「居心地」が近代文学ではじめて登場したのは、すでに述べたように国木田独歩の『疲労』（明治四十年）のようである。

そこでは具体的な場所、その空間の「居心地」をあらわしていた。

次にでてくる、田山花袋の『生』

（明治四十一年）では、結婚した嫁・お米が、夫は都会で働き、自分は夫の旧家・機屋の在所帯に同居させられ、田舎での人間関係に苦しむ。

「お米の身にしては、田舎のことが苦勞になる、長女の泣顔が気に懸る、夫

から手紙が一本も来ぬので愈々心配になる。衝突はするもの々、それがまた不愉快で居心地が悪い。」（十八）とある。

人間関係での「居心地」、つまり「人と人」の間にある「居心地」が語られる。

「具体的な場所・空間の居心地」と「人と人・人間関係にある居心地」。

これらふたつの「居心地」は、これ以後、文学では代表的なタイプとなる。

さらに、時代がぐっと下って、あらわれてくる三つ目のタイプは、「言葉」

そのものに対して抱かれる「居心地」である。

平成十年、さる文芸評論家が、ある著作のなかで、「アイデンティティ」（みずからの存在理由などといわれる）というものを取り上げて、これは日本人にとっては異質なものであり、そのような言葉であらわれる自己像が、自分の本質や心とは別のすがたとして、とても「居心地の悪い」ものとして意識せざるを得ない、というようなことを述べたことがある。

みずからを「みずからの本質や心とは別の」「居心地の悪い」姿として意識する、という。

なんと、この複雑さ。

当然、意識される自分の姿を「居心地の悪い」と意識する主体がある。文芸評論家の文章で、このように心のそとに「居心地の悪さ」への意識を置いているのは、ただ言い回しに過ぎないと片づけることはできるだろうか。

ろうか。

もしそうならば、「居心地」が時代とともに顔を出す、ひとつの証左ではないかと思える。

なにしろ、「いこち」という言葉を口に出すものはばかれる戦時下、敗戦、そして立ち直ろうという世の中がまだ、そう遠くないところにあったのだから。

「居心地」の対象は、このように物的世界から、人間関係を通して、抽象的な言葉へとひろがる。

「居心地」の対象には、たとえば「場の空気」というような、どうみても複雑なものがある。これをときほぐしていこうとするならここにでてきた三つのタイプをベースにして始めてもよさそうである。

とにかく文学上では、「居心地」という言葉が、物的世界の善し悪しから始まっていた、と知っておく。

心のそとに、どのような意識というものがあるのか、居心地をとらえるそれとは。

そういう難題はひとまずおきたい。

「居心地」が辞典の定義に従えば、「そこにいるときのころもち」だったことを思い返すと、この場合「そこにいる」自分とは、もし心理的空間のようなものを想定するなら、その中に占める自分というものであり、その落ち着く先、いつてみれば、心のおさまる所、と単純に考えておきたい気がする。

さらに「言葉」への反応の例は、ある翻訳に思い起こされる。

かの精神医学のフロイト大先生の文化論に「文化の居心地わるさ」という論文がある。

ここでは文化という対象が、人間にとつては「居心地」が悪い。なぜかと言つと、私たちは文化の本来の発展を願っているのに、それを邪魔する力が



え・安原喜秀